

「お辞儀」

向田邦子

留守番電話を取りつけて十年になる。

近頃はこの機械も普及したと見えて、見当違いなメッセージが入っていることも少なくなかったが、はじめの頃は楽しいのが多かった。

「なんとかコーヒー店だけど、モカ・マタリを二キロとブルー・マウンテンを一キロ、大至急届けて頂戴」

「××子がさ、どうしてもうち出てくつていうんだよ。そいでさ、あれ？ モシモシ、モシモシ、聞えないの？ モシモシ。フッフッフ（電話器に息を吹き込む音）おかしいな。

アー、本日ハ晴天ナリ」

こんなのは序の口で、いきなり、

「人を馬鹿にするな」

とどなられたこともある。

借金のいいわけするのが嫌だからといって、女を使って居留守を使うとは何事か。今日中に三十万、耳を揃えて返せ、と大変な見幕である。勿論、身に覚えのない全くの間違い電話なのだが、私の方も姓を名乗り、只今外出しているがこれは留守番電話でありますから、私が話し終って信号音が出たら一分以内で名前と用件をおっしゃって下さい、といっているのだから、どうしてこういうことになるのか、見当がつかない。

一分間では用が足りず、再びかけ直してパートⅡまで吹き込む人もあったが、面白か

ったのは黒柳徹子嬢であった。

「向田さん？ 黒柳です」

はじめにこういわないと、あとが出てこないらしく、早口でこういうと、あとはもつと早口で、こういう機械に向って電話をするのははじめてなので物凄くしゃべりにくい。感情的にしゃべるのもヘンだし、ニュースみたいにしゃべるのもおかしいし、どうしたらいいか迷ってしまいます、などといっているうちに一分たって切れてしまう。

つづいて、また、一通話。

「向田さん？ 黒柳です」

と同じ調子ではじまって、さっきの続きなんだけど、一分で早いわねえ。ほかの人はみんな一分でちゃんと用が足りるのかしら。みなさんすごく頭がいいんですね。あたしはダメだわなどといっているうちに一分終了。

またまた「向田さん？ 黒柳です」にはじまって、いまNHKのスタジオの副調整室から掛けているんだけど、あたしが一方的にしゃべっているもんだから、みんなチャックは気が狂ったんじゃないかみたいな顔であたしの方見てるの。と情況説明でこれも切れてしまった。

こんな調子で、立板に水の早口で九通話もしゃべりまくりながら、結局は、用件はあとでジカに話すわねということになったのだが、通して聞くと何とも楽しい九分間のショーになっている。

私は一人で楽しんではいけないと思い、無断で申しわけないと思ったが、打ち合せにみえたディレクター諸氏や来客にこのテープを聞かせて、もてなしのひとつにしたことがあった。黒柳嬢の一人連続九通話の記録はまだ破られていない。

今までに、一番無愛想な電話は、父からかかったものだろう。

「ウム」

どういうわけかまず物凄いうなり声である。つづいて、

「向田敏雄！」

と自分の名前をどなり、

「すぐ、会社へ電話しなさい。電話××の×××番！」

噛つくようにどなっている。なにか気に障ることもしたのかと泡くってかけたら、

お能の切符をもらったから取りにこいというごく普通の用件であった。父は八年前に亡くなったが、留守番電話で声を聞いたのはこれ一回であった。

母もこの頃では大分馴れたが、取りつけた当座はかなり個性的であった。

「お母さんだけだね。そうお。居ないの」

あきらかに腹を立てている。

「いないならいいですよ。機械にしゃべったってしょうがないもの。切るからね」

プンプンしている顔が見えるような声であった。

十年間に間違い電話を含めてユニークなものも多かったが、私が一番好きなのは初老と思われる婦人からの声であった。

「名前を名乗る程の者ではありません」

品のいい物静かな声が、恐縮し切った調子でつづく。

「どうも私、間違って掛けてしまったようでございますが。——こういう場合、どうしたらよろしいんでございましょうか」

小さな溜息と間があって、

「失礼致しました。ごめん下さいませ」

静かに受話器を置く音が入っていた。

たしなみというのはこういうことかと思った。この人の姿かたちや着ている物、どう  
いう家庭であろうかと電話の向うの人をあれこれ想像してみたりした。お辞儀の綺麗な  
人に違いないと思った。

半年ほど前、母の心臓の調子のよくないことがあった。発作性頻脈ひんみやくといって、一時  
的に脈搏が二百を越すのである。直接生命に別条はないというものの、本人もまわりも  
不安になり検査入院ということになった。この大晦日で満七十歳になる母は息災な人で、  
お産以外は寝込んだことがない。入院は生れて初めての体験である。一カ月ほどで退院  
出来るから心配ないといってきたのだが、死出の旅路にでかける覚悟で出かけたら  
しかなかった。

入院して二、三日は、まるでお祭り騒ぎであった。夜になると十円玉のありったけを  
握って廊下の公衆電話から今日一日の報告をするのである。

三度三度の食事の心配をしなくて暮すのがいかに極楽であるか。献立がいかに老人の  
好みと栄養を考えて作られているか。看護婦さんがいかに行き届いてやさしいか。テレ  
ビのリポーターも顔まけの生き生きとした報告であった。無理をして自分を励ましてい  
るところがあった。

三日目あたりから、報告は急激に威勢が悪く、時間も短くなってきた。四日目からは  
その電話もなくなった。

追い込みにかかっていた仕事に区切りをつけ、私が一週間目に見舞った時、母はひと

まわりも小さくなった顔で、ベッドに坐っていた。この日は、よそにかたづいている妹もまじえて姉弟四人の顔が揃ったのだが、辛いのは帰りぎわであった。

私が弟の腕時計に目を走らせ、

「ではそろそろ」

というかなとためらっていると、一瞬早く母が先手を打つのである。

「さあ、お母さんも横にならなくちゃ」

晴れやかな声でいうと思い切りよく立ち上り、見舞いにもらった花や果物の分配を始める。押し問答の末、結局私達は持ってきた見舞いの包みより大きい戦利品を持たされて追っ払われるのである。

「見舞いの来ない患者もいるのに、こうやってぞろぞろ来られたんじゃお母さんきまりが悪いから当分はこないでくれ」

と演説をしながら、一番小さな母が四人の先頭に立って廊下を歩いてゆく。

「本当にもうこないでくれよ」

くどいほど念を押しエレベーターに私達を押しこむと、ドアのしまりぎわに、

「有難うございました」

今までのぞんざいな口調とは別人のように改まって、デパートの一階にいるエレベーターガールさながらの深々としたお辞儀をするのである。

ストレッチャーをのせる病院の大型エレベーターは両方からドアがしまる。寝巻の上に妹の手編の挽茶色の肩掛けをかけて、白くなった頭を下げる母の姿は、更にもうひと回り小さくみえた。私は、「開」のボタンを押してもう一度声をかけたいという衝動を辛うじて押えた。

四人の姉弟は黙って七階から一階までおりていった。弟がくぐもった声で、ポツンと言った。

「たまんねえな」

末の妹が、

「いつもこうなのよ」

という。妹は毎日世話に通い、弟は三日に一度ずつのぞいているが、母は必ずエレベーターまで送ってきて、こうやって頭を下げる。しかも弟にいわせると、「人数によって角度が違う」というのである。

「今日は全員揃ってたから一番丁寧だったよ」

お母さんらしいやと私達は大笑いしながら、涙ぐんでいるお互いの顔を見ないようにして駐車場へ歩いていった。

母の改まったお辞儀はこれが二度目である。

二年前、私は妹をお供につけて母に五泊六日の香港旅行に行ってもらった。

「死んだお父さんに怒られる」とか「冥利が悪い」と抵抗したが、もともとおいしいもの好きで、年にしては好奇心も旺盛な人だから、追い出してさえしまえばあとは喜ぶと判っていたので、けんか腰の出発だった。

空港で機内持ち込みの荷物の改めがある。私は、母と妹が係官の前でバッグの口をあけているのをプラスチックの境越しに見ていた。

「ナイフとか危険なものが入っていませんね」

係官が型の如くたずねている。私は当然「ハイ」という答を予期したのだが、母は、

ごく当り前の声で、

「いいえ持っております」

私も妹もハツとなった。

母は、大型の裁ちばさみを出した。

私は大声でどなってしまった。

「お母さん、なんでそんなものを持ってきたの」

母は私へとも係官へともつかず、

「一週間ですから爪が伸びるといけないと思ひまして」

係官は笑いながら「どうぞ」といって下すつたが、私は、中の待合室でなぜ爪切りを持つてこなかったのと叱言をいった。

「出掛けに気がついたんだけど、爪切り探すのも気ぜわしいと思つて」

言いわけをしながら「お父さん生きてたら、叱られてたねえ」とさすがに母もしょんぼりしている。

少し可哀そうになったので、私はそつと立つて花屋へゆき、蘭のコサージュを作つてもらつた。三千円を二千五百円に値切り、母に手渡すと今度はえらい見幕で怒るのである。

「何様じゃあるまいし、お前は どうしてこんな勿体ないお金の使い方をするの」

あげくの果ては返しておいでよ、と母子げんかになつてしまった。一生に一度のことなんだからいいじゃないのと妹がとりなして、やっときげんが直り、胸につけたところで、搭乗を知らせるアナウンスがあつた。列を作つて改札口へ入りながら、母は急に立ちどまると、立っている私の方を振り向いた。てつきり手を振ると思つたので私は右手をあげた。母は深々とお辞儀をした。私も釣られて、片手を振りかけたまま頭を下げた

ので天皇陛下のようになってしまった。

私は入場券を買ってフィンガーに出た。冬にしてはあたたかいみごとに晴れた日であった。まっ青な空の一点が雲母うんものように光って、飛行機が飛び立ち下りてくる。

母の乗っている飛行機がゆっくりと滑走路で向きを変え始めた。急に胸がしめつけられるような気持になった。

「どうか落ちないで下さい。どうしても落ちるのだったら帰りにして下さい」

と祈りたい気持になった。

飛行機は上昇を終り、高みで旋回をはじめた。もう大丈夫だ。どういうわけか不意に涙が溢れた。たかが香港旅行ぐらいでと自分を笑いながら、さっきの裁ちばさみや蘭の花束のことを思い合せて口許は声を立てて笑っているのに、お天気雨のように涙がとまらなかった。

祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、三十五年前だろうか。私が女学校二年の時だった。

通夜の晩、突然玄関の方にざわめきがあった。

「社長がお見えになった」

という声があった。

祖母の棺のそばに坐っていた父が、客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀をした。

それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。当時すでにガソリンは統制されており、民間人は車の使用も思うにまかせなかった。財閥系のかなり大きな会社で、当



親のお辞儀を見るのは複雑なものである。

面映ゆいというか、当惑するというか、おかしく、かなしく、そして少しばかり腹立たしい。

自分が育て上げたものに頭を下げるということは、つまり人が老いるということとは避けがたいことだと判っていても、子供としてはなんとも切ないものがあるのだ。